朝日新聞 S63 4/15(金)

東葛飾の「ヌーベル文化賞」

郷土史家の一色氏と玩具制作者の松本氏

「長年すばらしい仕事」

文化

東葛飾地域の文化・芸術振興を図ろうと、柏市の画廊経営者が昨年設けたヌーベル文化振興会（委員長・砂川美術館長砂川七郎氏）の第一回ヌーベル文化賞の受賞者に郷土史家一色勝正さん(七八)＝流山市東深井＝と、下総首人形などの玩具（がんぐ）制作者、松本節太郎さん(八四)＝柏市根戸＝が決まった。

「目立たないが、長年素晴らしい仕事をしている」が、五人の同賞審査委員会の選考理由。授賞式は十七日午前十一時から、JR柏駅東口の京北ホールで行われ、二人に表彰状、記念品、賞金二十万円が贈られる。

一色さんは水戸市出身。四十三年、いまのNTTを定年退職。在職中から興味をもっていた金属や石材に刻みこまれた文字「金石文」の研究を続け、東葛一帯の野に埋もれた石仏を調べた。「流山市金石文記録集」（計五巻）などに、調査資料を提供した。また流山、我孫子両市の文化財審議会委員、市史編さん委員も務めている。

松本さんは東京・下谷出身。戦災で柏に移り、戦後裏山の粘土で、十二支や七福神の首人形を作り、かまどで焼いたあと、泥絵の具で彩色したのが始まり。カッパや動物の張り子面などを含めた人形は「ユニークで素朴」という評価を得ている。

同振興会は、市内で画廊を経営する鈴木昇さん(三九)が、同地域文化の向上、発展に寄与しようという狙いで、知人らと相談して設立した。文化賞賞金には、画廊の利益の一部が充てられている。